

鳥声録音－野鳥と共に歩んだ蒲谷鶴彦

KABAYA-Wildlife Sound Archive 蒲谷剛彦



日本野鳥の会は昭和9(1934)年発足。また、東京支部(現日本野鳥の会東京)の発足が昭和22年。両者とも長い歴史があります。私の父、蒲谷鶴彦(1926～2007年)は戦前から日本野鳥の会に属し、東京支部の設立時には若手幹事として名を連ね、高野伸二氏の参加後は共に活動しています。

鶴彦は大正15年、新宿の柏木(今の西新宿7丁目)生まれ。小さい頃から鳥が大好きで、小学校入学前には伝書鳩を飼っています。しかし、当時の新宿は武蔵野と呼ぶにふさわしい閑静な場所。なんとイタチに襲われてしまいます。この時の光景は幼い鶴彦にとって大変ショックでした。それ以降、飼い鳥ではなく野鳥に憧れてゆきます。

小学生になっても鶴彦の鳥好きは治まりません。『少年倶楽部』ではなく、薄く難しい『野鳥』誌を、小遣いを貯めて購入します。この『野鳥』誌の昭和11年第3巻第5号に塚本閻治氏の「野鳥の声を寫す話」が掲載されます。「米国博物館とコーネル大学が共同で、大型自動車を改造し、映画の撮影・録音機材を積み込み野鳥の声を録音した。」という記事は、鶴彦の心に深く刻まれました。

また、入会案内を見て、日本野鳥の会の創設者 中西悟堂先生(1895～1984年)に弟子入りします。同期の小学生には、日本野鳥の会顧問の鈴木孝夫慶応大学名誉教授などの名も記されています。さらに、旧制中学に入学すると、日本鳥学会も聴講させて貰っています。当時の日本鳥学会例会は華族と鳥類学者の会合です。聴講に際して、山階芳麿侯爵、蜂須賀正氏侯爵、黒田長禮侯爵、清棲幸保伯爵などの先生方に特別なご配慮を頂きました。



フィールドでは、高尾山へ足しげく通います。戦前・戦中・戦後の7年間に渡る観察記録は、松山資郎氏のご助力により『武州高尾山の鳥』と題して林野庁の講習会資料として発行され、清水徹男氏の『高尾山野鳥観察史』(けやき出版)にも紹介されています。

終戦後の混乱期を過ぎると、アメリカでテープレコーダーが開発されたとの雑誌記事を見つけます。少年時代に読んだ「野鳥の声を寫す話」が忘れられない鶴彦は、テープレコーダーの購入を試みますが、日本では発売されていません。諦めきれない鶴彦は、なんと録音機の自作に着手してしまいます。日本野鳥の会の有志から募金を頂き、弟の芳比古と共に1年後に、重さ約30kgのAC駆動の録音機を完成させます。そして、向かった先は奥多摩の御岳山。日本野鳥の会ゆかりの駒鳥山荘のある山です。狙いの鳥は声のブッポウソウといわれたコノハズク。スギの木に縛り付けたマイクのすぐ側でコノハズクが鳴いてくれるという御岳神社の神様の思し召しに預かり、初めての野外録音に成功します。

その後、軽井沢の星野温泉などで録音を続け、その成果が認められ昭和28年に文化放送の番組として採用されます。この『朝の小鳥』は現在、松田道生氏に引き継がれており長寿番組になっています。なお、放送当時の「収録構成は蒲谷兄弟でした。」というアナウンスを今でも覚えている方もいらっしゃると思います。

このように鶴彦は幼い頃から野鳥と共に歩みましたが、天国でも親友の高野伸二さんと鳥談義をしていると思います。そして、私は空を見上げると二人の微笑む姿が雲の上にあるような気がします。たぶん、二人して日本野鳥の会東京を見守っているのだと思います。

